

14 通学路の危険箇所マップづくり

題材設定の理由	生徒の通学時における交通ルールやマナーの問題が指摘されることが多い。また、車両との接触や衝突等の危険性も高い。今までのヒヤリハット体験等をもとに危険箇所マップの作成を通して、安全な通学態度を身につけさせたいと考え、本題材を設定した。
指導のねらい	1.通学路に潜む危険を具体的に考察・検討させ、地図上に表現する作業を通じて安全な通学方法を理解できるようにする。 2.地域住民のヒヤリハット体験の聞き取り調査を通し、多角的視点から通学路の安全を考えて通学することの大切さを理解できるようにする。
準備	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを人数分プリントしておく。 白地図(班に1枚と全体用の大きな白地図1枚)、シール(白地図に貼り付けるための小さなシール。5色程度)は生徒1人あたり20枚程度、付せん紙。 通学路等別に班分けし、事前調査をさせておく(実地調査、地域住民からの聞き取り調査) マーカーペン(黒・赤・黄・青)

段階時間	指導事項	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ●本時のねらいと内容 ●ワークシートの利用方法 	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のねらいと学習方法について説明を聞く。 ○通学路等の班別に着席し、班長の司会で作業が進められるようにする。 ○ワークシート、シール、付せん紙、白地図、マーカーペンの利用方法について説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○シールは色別に、対歩行者、自転車、四輪車、二輪車等でヒヤリハットしたことを分けて貼ることを周知させておく。
展開 40分	<p>1.通学路等班別危険箇所マップづくり</p> <p>2.危険箇所マップの内容の班別検討</p> <p>3.通学路の危険と安全対策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○通学路等別の班に分かれ、自分たちの体験や、あらかじめ実地調査や聞き取り調査してきた資料をもとにワークシートを参考にし、白地図上にヒヤリハットした理由を述べながらシールを貼る。 (1) 駅から学校までの通学班の危険箇所マップ (2) 地域別に自宅から学校までの通学班の危険箇所マップ ○通学路等班別に作成した危険箇所マップで、シールが多く貼られた所や少ない所についてその理由や原因を検討し安全対策をまとめる。 (1) 交通量や見通し等の問題 (2) 道路の線形や信号機の有無等の問題 (3) 自らの通学態度がヒヤリハットの誘因となることの問題等 ○班の代表者が、班で話合った要点を発表し、黒板に貼られた全体の大きな白地図にまとめ、安全な通学方法について考えを深めよう。 (1) ヒヤリハットする人の多い箇所の安全な通過方法 (2) ヒヤリハットする人の多い箇所の安全対策 	<ul style="list-style-type: none"> ○班ごとにワークシートを参考に白地図にシールを貼るようにさせる。 ○地域住民のヒヤリハット体験を班員で確認しあいながらシールを貼るようにさせる。 ○子どもや高齢者のヒヤリハット体験は、その理由をよく考えさせる。 ○シールが多く貼られた場所や少ない場所について、それがなぜであるかについて積極的に意見を出させる。 ○道路の形態や交通安全施設の設置状況の違いに注目させる。 ○シールが貼られない場所で起きた事故の原因についても考えさせる。 ○通学路での危険箇所について理解させる。 ○多くの人が危険を感じる箇所の特性をよく理解して、安全に通学できるようにさせる。 ○道路施設等での改善点があるか、考えさせる。
まとめ 5分	通学路での危険箇所について理解させる	<ul style="list-style-type: none"> ○多くの人が危険を感じる箇所の特性をよく理解して、安全に通学できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○危険箇所では、立ち止まる、徐行するなどしてしっかり安全確認することが第一であることを強調する。
評価	<p>1.どのような所で多くの人が危険を感じているかについて理解できたか。</p> <p>2.安全確認を第一にしてヒヤリハット体験を繰返さないとの決意が見られたか。</p>		

通学路の危険個所マップづくり

ステップ
1

地図のコピーを貼りあわせて通学路の地図をつくりましょう。

ステップ
2

これまでに自分がヒヤリハットした個所と、家族や近所の高齢者、小学生から聞いたヒヤリハットした個所に色別シールを貼りましょう。

- 歩行者として
- 自転車利用者として
- 原付利用者として

ステップ
3

シールを貼った個所でなぜヒヤリハットしたか、付せん紙に理由を書いて貼りましょう。

ステップ
4

シールがたくさん貼られた個所（＝危険個所）について、意見を出し合い、他の人のヒヤリハット体験を聞いて、共通点、違う点、新しい発見を書きとめてみましょう。

1. 共通点はどこか（相手、状況など）
2. 違う点はどこか（相手、状況など）
3. 新しい発見があったか

ステップ
5

シールがたくさん貼られた個所を安全に通過する方法について、意見を出し合しましょう。また、道路設備等に改善が必要なところがあれば意見を出し合しましょう。

ワークシートの利用についての解説

通学路でヒヤリハットした体験と一緒に地図にプロットしていく「危険個所マップづくり」の具体的な方法について、以下解説する。

事前に家族や近所の高齢者、小学生から、危険個所について聞き、その情報もあわせて地図に盛り込み、高校生以外の視点からも危険個所を確認する。

【用意するもの】

(1)白地図（2m四方）

●地図は(株)ゼンリンのものがよい。使用にあたってはゼンリンに事前了解をとる。

●ゼンリンの地図の一部は公にされていて、パソコンなどで取り込めるようになっているので活用すると便利。

<http://www.do-map.net/>

(2)色分けシール（5色くらい。生徒1人に20枚程度配布）

(3)付せん紙（はがせるもの）

ステップ 1

◆作業は白地図づくりから始まる

白地図は世帯主名まで入った地図がよい。

地図を拡大コピーして貼り合わせ、2m四方くらいの部分マップをつくる。次に生徒に、通学路を確認させる。

ステップ 2

◆色分けシールをヒヤリハット体験があった個所に貼っていく

シールは5色くらい用意し、生徒1人に20枚ほど配る。

●シールの色分けの仕方は班ごとに決めさせる（危険を感じたときの自分の交通手段と相手によって決めていく／歩行者対四輪車、自転車対四輪車、原付対四輪車など）

●歩行者としてヒヤリハットしたこと、あるいは自転車としてヒヤリハットしたことなど、カテゴリー別に順番に作業を進めていくとよい。

●シールは、同じ場所に何人もが貼ってよい。集中してシールが貼られたところが危険個所を示すことになる。

ステップ 3

◆付せん紙に危険を感じた理由を記入して貼り付ける

付せん紙は、貼り替えができるように、はがれるものを使う。

付せん紙には、具体的なヒヤリハット内容を記入する。

ステップ 4

◆シールが集中した危険個所について話し合う

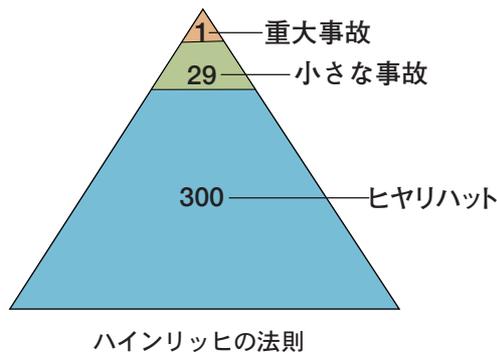
どんなヒヤリハット体験が多いかを班のメンバーで話し合う。話し合いの中で、共通点、異なる点、新しい発見等を書きとめ、どうすれば、危険な目にあわないか意見を出し合う。

道路施設等に問題があると思われる場合には改善点も出し合う。

ステップ 5

◆白地図を黒板に貼り、班ごとに成果を発表する

小さなヒヤリハットをなくすことが事故防止につながる



危険箇所マップづくりは、交通安全を身近に感じさせる参加型の教育手法として、評価が高まっている。互いに意見を出しながら、共同で作業し、まとめ上げていくというおもしろさに加え、他の人の意見を聞くことによって、自分で気づかなかった危険を発見できる。

さらにヒヤリハット体験を出し合うのには、交通安全では大切な意味がある。

「ハインリッヒの法則」というものがある。1件の重大事故の背景には、29件の小さな事故があり、29件の小さな事故の背景には300件のヒヤリハット体験があるという産業災害のデータである。

大事故を起こさないためには、小さなヒヤリハットの場面をなくすことが重要だということである。危険箇所マップづくりで、シールがたくさん貼られた箇所は、将来、大きな事故が起きるかもしれないという警告を発する場所である。危険箇所について話し合うことは、ヒヤリハットを少なくし、ひいては事故防止につながっていく。

危険箇所マップづくりをさらに有効にするためのポイント

「危険箇所マップ」と「事故マップ」を比較する

【用意するもの】

- ・透明シート（地図と同じ大きさのもの）
- ・黒いシール
- ・付せん紙（危険を感じた理由を記入して貼り付ける。はがせる付せん紙がよい）

危険箇所マップは、あくまでも参加者の体験にもとづいてつくられる。実際に事故が起きた場所と一致するとは限らない。

危険箇所マップづくりの次のステップとして、事故が起きた場所を示す「事故マップ」をつくって2つのマップを比較し、事故への考察を深めるとよい。

事故マップづくりには、地域の警察の協力が必要になる。過去3年間に地域で起きた事故データ（事故の箇所、事故の形など）を教えてもらい、地図の上に透明シートを置いて、実際に事故が起きた箇所に黒いシールを貼っていく。

危険地点と事故発生地点を重ねると、以下の3つのパターンが明らかになる。

- ①ヒヤリとしている場所で事故が起きているケース
- ②ヒヤリとしているけれど事故が起きているケース
- ③ヒヤリしていないのに事故が起きているケース

①は当然のこととして、その場所が危険な場所であることを確認させ、多くの人々に認知させることが必要となるが、とりわけ②と③が問題になる。

②についてはこれから事故が起ころ可能性の高い場所であるので、警察や道路管理者に、この場所は事故は起きているけれどもヒヤリとしている人が多い、という情報を伝えれば、ヒヤリ段階で対策が講じられる。警察への提案に有効なデータとなり得るかもしれない。

③のケースはとくに注意が必要である。ヒヤリとしていれば注意をするが、ヒヤリしていない場所で事故が起きているため、一層危険な場所といえる。「みなさんがヒヤリしていないのに事故が起きている。とても危険な場所です」というPRが必要になる。

生徒に①～③の問題を考えさせ、どうすれば危険が防げるかをディスカッションさせる。

なお、地域の事故データについては、生徒の参加意欲を高めるために、生徒に調べさせるのもよい。事前に、先生から地元警察署に、危険箇所マップづくりの趣旨などを説明、生徒の取材への協力要請をしておくことが必要になる。

危険箇所マップづくりを地域活動に発展させる

1. 高校生がリーダーになって、高齢者や小学生の危険箇所マップづくりをする

交通安全を身近に感じてもらうために、さらに一歩進めて、高校生が自分たちでつくったマップを、地域の高齢者や小学生の交通安全のために役立ててもらおうための活動にまで発展させると、さらに効果が期待できる。

高校生が指導者の立場で、高齢者や小学生に、自分たちの成果を伝えていく。そのプロセスが、学習であり、達成感ももたらす。さらに地域貢献にもつながる。

[活動例]

- 高校生が作成した危険箇所マップを持って、小学校へレクチャーに行く。
- 危険箇所マップを持って、老人会で話をする。
- 危険箇所マップをもとに、チラシやポスターをつくり、老人ホームなどへ配付する。
- 危険箇所マップに透明シートを貼って、病院、老人会の会場や小学校に掲示させてもらい、期間を決めて、それを見た人々に新たに危険箇所にシールを貼ってもらい、理由も書いてもらう。
それをもとに、生徒に事故多発箇所のチェックと対応法を考えさせ、小学校や老人会などでレクチャーする。
- 交通安全施設の問題であれば、所轄の警察署に改善要求の提言をしに行く。など

①高齢者の危険箇所マップづくりのポイント

- ・高校生に、高齢者事故の現状を説明。事故防止のために危険箇所マップづくりの意義を説明。
- ・生徒は手分けして高齢者を訪問し、危険体験を取材する。
- ・それを地図上にシールで示し、危険を感じた理由を付せん紙に書く。
- ・地図をコンピューターにインプットし、危険箇所や危険を感じた理由を書き込み、地図を完成する。
- ・一方、警察で過去3年の高齢者事故実態を教わり、地図上に黒いシールを貼る。
- ・地図を持って高齢者宅や集会場を訪問して、危険箇所や安全な通行方法を説明する。

②小学生対象の交通安全テキストづくりのポイント

- ・高校生に、小学生の事故の現状と、事故防止のために危険箇所マップづくりの意義を説明。
- ・生徒は手分けして小学生と面談し、危険体験を取材する。
- ・一方で、警察で過去3年間の小学生の事故実態を教わり、地図上に黒いシールを貼る。
- ・地図をコンピューターにインプットし、生徒に安全対策を練らせる。
- ・それを警察や道路管理者に示し、安全施策の提案をさせる。
また、警察や地区の交通安全団体にも参加してもらい、チラシや教材をつくって小学校で説明したり、使ってもらったりする。

*地元紙などに生徒の活動を紹介してもらう

生徒の意欲を起こさせるために、新聞の地域版、市町村の広報誌などに、危険箇所マップづくりについて記事掲載を依頼するなども考えられる。

2. 事故多発箇所をビデオに収録

地域の危険箇所についての理解を深める、ということをねらいとするには、次のような展開例も考えられる。

- (1)所轄の警察署から現場の交通警察官の方に来てもらい、周辺地域でその人が扱った事故について、現場で起きたことを話してもらう。(高齢者や電動車イスと自転車、四輪車との事故など、話に広がりが出るようなケースが望ましい)
- (2)事故が起こったとされる場所にビデオカメラを設置。数時間固定して撮影を続ける。(肖像権の侵害にならないように十分な配慮が必要である)
- (3)撮影したビデオを15分くらいに編集。事故につながりそうな危ないシーンを集める。
- (4)編集したビデオをクラスで発表。実際に事故が起こったときは何がどう問題だったのか、討論する。
- (5)編集したビデオと討論でわかった問題点を持って、小学校や、老人クラブなどでレクチャーをする。道路の問題なら、警察へ提言する。

高校生の危険個所マップづくりを地域のボランティア活動につなげよう

鈴木春男 自由学園最高学部長、千葉大学名誉教授

高校の交通安全教育では、受け身ではなく生徒に主体的に参加してもらえるような教育、それを動機づけるような企画が必要だと思います。さらに、生徒に一定の役割を演じてもらうこと、それと同時に、生徒にも興味をもってもらい、しかも自分のためになるものが大事だと思います。

「ネイバーフッド・ウォッチ」プログラムのヒント

少し年齢は下がりますが、私がアメリカでリサーチした「ネイバーフッド・ウォッチ」という交通安全教育はまさに、その好例だと思います。

「ネイバーフッド・ウォッチ」は、アメリカのアラバマ州のある街で行われていた教育プログラムです。小学生が高齢者を訪問して生活の手助けをする、という活動です。これは表向きは小学生のボランティア教育。実際には、高齢者のための交通安全教育でもあるのです。

高齢者に対して、子どもたちが高齢者の家までの行き帰りに事故にあわないように、「子どもたちに交通安全教育をしてほしい」と依頼します。そのために、正しい交通ルールをまず高齢者自身が身につけてほしいということで、ルールブックを渡して読んでもらうのです。高齢者は子どもたちのためにと勉強して、交通安全のための具体的な行動を子どもたちに伝えます。その過程で、高齢者も交通安全を学び、結果的に高齢者事故が減るのです。

この例をヒントにして、今、茨城県岩井市の交通ボランティアと警察が協力して、小学生が高齢者を訪問してヒヤリ地図をつくるという活動が始まっています。小学生の活動ですが、高齢者にも協力を依頼して小学生に交通安全教育をしてもらう、という形で、高齢者自身の交通安全教育にもつなげる。相手のために何かする、という役割を与えることで動機づけし、交通安全教育を行うという手法です。

マップづくりだけで終わらせない

高校生対象の危険個所マップづくりは、主体的に参加できる交通安全教育ですが、自分たちが上げた成果を、地域の高齢者や小学生に伝えていくところまで行うことは大変よいことだと思います。高齢者を例に取れば、高校生は、事故の現状を高齢者に説明することを通して、高校生には「高齢者の事故を減らすための交通安全教育をする」という役割が与えられます。その手段として、学校区のヒヤリ地図をつくるわけです。

また、説明のさい高齢者から交通ルールなどの質問が出たときに答えられないとまずいので、といって高校生に交通安全教育をすることができます。これは高校生による、高齢者に対するボランティア活動ですが、相手に対して何かをするという主体的な役割を与えることで、自分も勉強しますから、教育効果も期待できます。

さらに、地域貢献になることも重要です。同じ手法で、高校生に、小学生や中学生の交通安全教育をさせることも考えられます。高校生に小・中学生の交通安全のための教科書をつくらせることなどもできるでしょう。また危険個所マップをつくって警察や道路管理者へ危険個所の改善提案をする、ということも考えられます。

今の高校生は、つくられたものに乗せられることに対する拒否反応、反発があると思います。「今自分たちの周りの問題で何が重要なのか」ということを発見してもらうところからスタートさせることが大事です。危険個所マップづくりは、その動機づけにもなります。